

雪の夜

小林多喜二

青空文庫

仕事をしながら、龍介は、今日はどうするかと、思った。もう少しで八時だった。仕事
が長びいて半端はんぱな時間になると、龍介はいつでもこの事で迷った。

地下室に下りていって、外套箱がいとうばこを開あけオーバーを出して着ながら、すぐに八時二十分
の汽車で郊外の家へ帰ろうと思った。停車場は銀行から二町もなかった。自家うちも停車場の
近所だったから、すぐ彼はうちへ帰れて読みかけの本が読めるのだった。その本は少し根
気の要いるむずかしいものだったが、龍介はその事について今興味があった。彼には、彼の
癖として何かのつまずきで、よくそれつきり読めずに、放ってしまう本がたくさんあった。
龍介はとにかく今日は真直まっすぐに帰ろうと思った。

宿直の人に挨拶あいさつをして、外へ出た。北海道にめずらしいベタベタした「暖気雪」が降
っていた。出口にちよつと立ち止まって、手袋をはきながら、龍介は自分が火の気のない
二階で「つくねん」と本を読むことをフト思った。彼はまるで、一つの端から他の端へ一
直線に線を引くように、自家へ帰ることがばかばかしくなった。彼は歩きだしながら、ど

うするかと迷った。停車場へ来るとプラットフォームにはもう人が出ていた。

龍介はポケットに手をつつこんだままちよつと立ち止まった。その時汽笛が聞えた。それで彼はホツとした気持を感じた。彼は線路を越して歩きだした。後で踏切りの柵の降りる音がして、地響が聞えてきた。

龍介は図書館にいるTを訪ねてみようと思つた。汽車がプラットフォームに入つてきた。振り返つてみると、停つている列車の後の二、三台が家並の端から見えた。彼はもどろろか、と瞬間思つた。定期券を持つていたからこれから走つて間に合うかもしれなかつた。彼は二、三步もどつた。がそうしながらもあやふやな気があつた。笛が鳴つた。ガタンガタンという音が前方の方から順次に聞えてきて、列車が動きだした。そうなつてしまうと、今度はハッキリ自家へ真直に帰らなかつたことが、たまらなく悔いられた。取り返しのつかないことのように考えられた。龍介は停車場の前まで戻つてきてみた。待合室はガランとしていてストーヴが燃えていた。その前に、印も何も分らない半纏を着て、ところどころ切れて脛の出ている股引をはいた、赤黒い顔の男が立つていた。汚れた手拭を首にかけていた。龍介は今度は道をかえて、賑やかな通りへ出た。歩きながら、あの汽車で帰つたら、もう家へついて本でも読めたのに、と思つた。が一方、そういうはつきりしな

い自分をくだらなく思った。そしてこんなことはすべて、彼は恵子との事から来ていると思った。が龍介は頭を振った。彼にとつて、恵子との記憶は不快だった。記憶の中に生きている自身があまり惨めに思えたからだだった。

その通りはこころもち上りになっていて、真中を川が流れていた。小さい橋が二、三間おきにくつもかけられている。人通りが多かった。明るい電燈で、降ってくる雪片が、ハッキリ一つ一つ見えた。風がなかったので、その一つ一つが、いかにものんきに、フラフラ音もさせずに降っていた。活動常設館の前に来たとき入口のボックスに青い事務服を着た札売ふだうりの女が往来をぼんやり見ていた。龍介はちよつと活動写真はどうかろうと思つた。が、初めの五分も見れば、それがどういうプロセスで、どうなつてゆくか、というところがすぐ見透みえすく写真ばかりでは救われなれないと思つた。しかし今ここに来ているちよつと評判のいい最後のだけ見たい気になつた。戻つて入つてしまふか、「入つてさえしまえば」こんな気持にきまりがつく、そう思つた。が、そんなことを意識してする自分が、とうとう惨めに考えられた。彼はよした。

龍介は賑やかな十字街を横切つた。その時前からくる二人をフト見た。それは最近細君を貰つた銀行の同僚だつた。彼は二人から遠ざかるように少し斜めに歩いた。相手は彼を

知らないで通り過ぎた。ちよつと行つてから彼は振りかえつてみた。二人は肩を並べて歩いてゆく。やつてやがると思った。が振りかえつた自分に赤くなつた。

図書館は公園の中にあつた。龍介は歩きながら、Tがいなかつたら、また今晩は変に調子が狂うかもしれないと思つた。そう思うと何んだかいなかもしれない気がしてきた。が図書館の入口の電燈が見え始めた時彼は立ち止まつた。なぜ自分はこう友だちのところへ行くのか、と考へた。友だちを訪ねることが何か自分の氣持にすっかりしたところのないことから来ており、それが友だちにハッキリ見られる氣がした。

——入つていつて、「遊びに来た」と言う。その時相手がいかにも落着いた態度で出てきたら、手にペンでも（本でもいい）持つて出てきたら、その時こそ惨めな自分が面と面を突きあわすことを露骨ろこつに感ぜさせられるだろう。それにはかなわない。

——上りになつていた道をむしろ早足で歩いてきたので身体が熱かつた。Tのいる室に明るく電燈がついているのが見えた。そこで机の前に坐り、外のことにはちつとも氣を散らさずに、自分の仕事をしているTがすぐ想像できた。そんなところへこのあやふやな氣持を持つてゆき、それをゴマかすためにでたらめをむちやくちやにしゃべる！ とんでもないことだ！ ことごとくにこんな自分が情けなく思つた。彼は戻りかけた。しかしもう氣

持が、寄れないところへ行っていた。彼は別な、公園の道に出た。そこは市役所の裏で暗かった。道の両側には高い樹が並んで立っており、それが上の方で両方枝を交えていた。そして、まだ落ちていない葉にさわる雪のかすかな音が、ずうと高い所から聞えた。

龍介はもう一人、画をかくSに会いたかった。しかしこれからすぐ停車場へ行けば九時十分の汽車に間に会う。それからでも家で何か勉強できる気がした。とにかく気持ちをどっか一方へ落着かせたかった。

二

高台になつてゐる公園からは街が一眼に見えた。一番賑やかな明るい通りの上の空が光を反射していた。龍介は街に下りる道を歩きながら、

——俺はいつたい何がしたいんだろう、と考えた。しかし分らなかつた。分らない？
フンこんなばかな理窟の通らない話があるか、そう思い、龍介は独りで苦笑した。

龍介は街に入ると、どこかのカフェーに入つて、Sに電話をかけてみようと思つた。が彼の通つてゆく途中の一軒一軒が、彼を素直な気持ちで入らせなかつた。結局、彼は行きつ

けの本屋に寄つて、電話を借り、Sにかけた。交換手がひっこんで、相手が出る、その短かい間、龍介は「いてくれれば」という気持と「かえていないでくれれば極りがつく」という気持を同時に感じた。相手が出ぬ前、受話機をかけてしまうかと思ひ、ためらつた、がその時電話口にSの妹が出た。Sはいなかつた。彼はがっかりした。今晚はまただめになつたと思つた。

本屋を出たとき龍介は、ギョツとした。——恵子だ！ 明るいところからなので、視覚がハッキリしなかつた。が、電気のようにビリンとそういう衝撃が来た。龍介には見なおせなかつた。見なおすよりまず自身を女からかくす、それが第一だつた。彼は暗がりへ泥ぬ津たるみをはね越すように、身を寄せた。——が恵子ではなかつた。ホツとすると、自分が汗をかいていたのを知つた。ひとりで赤くなつた。

龍介は街を歩く時いつも注意をした。恵子と似た前からくる女を恵子と思ひ、友だちといつしよに歩いていたときでもよくきゆうに引き返して、小路へ入つた。恵子は大柄な、女にはめずらしく前開きの歩き方をするので、そんな特徴の女に会つと、そのたびに間違つてギョツとした。不快でたまらなかつた。

龍介の恵子に対する気持はいろいろな経過をふんでからの、それから出てきたものだつ

た。かなり魅惑のある恵子が、カフエーの女であるということから受ける当然の事について気をもみだした、それが最初であった。彼はそういう女がいろいろゆがんだ筋道を通つてゆきがちなを知つていた。その考えが少しでも好意を感じている恵子に來たとき、

「ちよつと」平気でおれなかつた。この平気でおれない「関心」が、龍介の恵子に対する気持を知らない間に強めていった。しかし一方、彼は自分が身体も弱く金もないということの意識でそういう気持を抑えていった。彼は自分の恋愛をたんに情熱の高さばかりで肯定してゆく冒険ができなかつた。彼にとつて、そんな冒険はできない、というより、そんな「不道德なこと」はできない、といった方がより当っている。そうだった。そしてその二つが同じように進んでいたとき、龍介は気軽に女と会えた。恵子のかえつて彼に露骨な好意を見せた。女から手紙が時々來た。「あなたがくる気が朝からしていた。が、とうとうあなたはお見えにならない。胸が苦しくなる想いで寝た」そんなことなど書かれていた。恵子についていろいろな噂うわさが龍介の耳に入った。恵子が淫いんばい売ばいをしているということも聞いた。それについて入念な——『Eternal Prostitution』、『Periodical Prostitution』、『Five yen a time』——というような言葉までできていた。彼はその事について、恵子にたずねた。恵子は——「そんなことでしたら、誰がなんと言おうと私を信じてもらつててもいいの！」と

言った。恵子が淫売で拘留されたことがあるとか、家の裏に抜穴があるとか、もつと詳くわしいことが噂立った。龍介はイライラしてきた。恵子を信じていても、やはりそんなことがいろいろに意識のうちに入ってきて、不快だった。しかしそれと同時に、彼は恵子をすっかり自分のものにしたいたい気持を感じだしてきた。しつこい強さできた。龍介は危い自分を意識したが、だめだった。彼の気持はずうと前に行ってしまった。彼はそのことを打ち明けるのに、市から汽車に乗って三十分ほどで行けるZの海岸にしようと考えた。その海岸は眼路めじもはるかなといつていいほど砂丘が広々と波打っていた。よく牛が紐ひものような尻尾しっぽで背のあぶを追いながら草を食っていた。彼はそこ以外ではいけないと思った。彼はそこでのことをいろいろに想像した。

龍介は他にお客がなかったとき恵子に「Zの海岸へ行く」都合をきいた。言ってしまうて、自分でドキまぎした。

恵子は「どうして？」とききかえした。

「……遊びにさ」

「そうねえ——考えておくわ」と言った。

「考える？」

「でも、いろいろ都合があるし……それに主人にも……」

「そう、じゃ二、三日に来るよ」龍介は外へ出たときホツとした。

彼は二、三日経て行つた。恵子は今度の日曜ならいい、と言つた。彼は汽車の時間をきめ、停車場で待つことにして歸つた。土曜日彼はさしあたり必要のない冬服を質屋に持つてゆき、本を売つた。それで金の方は間に合つた。次の日停車場へ行つた。天気なので、どこかへ出かける人でいっぱいだった。龍介は落ちつかない気持で待合の入口を何度も行つたり来たりした。時計を何度も見た。それから恵子のくる通りの方へも出かけてみた。汽車がプラツトフォームへ入つた。恵子は来なかつた！

龍介は汽車が出てしまつたあと、どうしようか、と思つたが、カフェーへ行つてみた。恵子は手拭を「ねいさん」かぶりにして掃除をしていた。彼が入つてくると、行けなかつたことを弁解した。彼は今度の日を約束して歸つた。約束の前の晩、彼はこの前のようなことがないように、と思ひ、カフェーへ出かけてみた。女は彼にちやうど手紙を出したところだ、と言ひ、きゆうにまた明日用事ができて行けなくなつたと言つた。そして本當に気の毒そうな顔をした。彼はまたむりをして作つた次の日のための金をそこで使つてしまつた。歸つたのが遅かつた。

二、三日して龍介はまたカフェーへ行つた。そして今度の日曜にはぜひ行こうというこ
とにきめて帰つてきた。土曜の暮れ方から雨空になった。朝眼をさますと土砂降りだった。
龍介はがっかりして蒲団ふとんにもぐりこんでしまった。変な夢ばかりを見て、昼ごろに眼をさ
ました。これで三度だめになった。そしてこういうことが、彼の気持をもズルズルにさし
た。彼はその間ちつとも落ちつけず、何んにも仕事ができなかつた。しかし何回ものこ
ういことが、かえつて彼の恵子に対する気持を変にジリジリと強めていった。彼はまた女
のところへ出かけていった。女も「今度こそ本当にねえ！」と言つた。

約束の日まで一週間ぐらいあつた。その間雨ばかり降つた。雪がまじつたりした。龍介
は天気ばかり気になり夕刊の天気予報で、機嫌よくなつたり、不機嫌になつたりした。自
分でもその自分がとうとう滑稽こっけいになつた。土曜日から天気があつた。龍介は初めて修学
旅行へ行く小学生のような気持で、晩眠れなかつた。その日彼は停車場へ行つた。彼は朗
らかな気分だつた。が、恵子は来なかつた！ どうすればいいのか？ 龍介は分らなくな
つた。

龍介は、ハッキリ自分の恵子に対する気持を書いた長い手紙を出した。ポストに入れる
とき、二、三度躊躇ちゆうちゆうした。龍介には「ハッキリ」することが恐ろしかった。がこれか

ら先いつまでもこのきまらない気持を持續けたら、その方で彼はだめになりそうだった。彼は思いきつて、手紙を投げ入れた。そしてハンドルを二、三回廻すと、箱の底へ手紙が落ちる音がした。恵子からの手紙の返事はすぐ来た。冒頭ぼうとうに「あなたは遅かった！」そうあった。それによると最近彼女はある男と結婚することに決まっていた。――

「犬だつて！」犬だつて、これじゃあまり惨めみじだ！龍介は誇張なしにそう思つて、泣いた。龍介は女を失つたということより、今はその侮辱ぶじよくに堪えられなかつた。心から泣けた。――何回も何回もお預けをしておいてしまいにあかんべい、だ！龍介はこの事以来自分に疲れてきた。すべて自信がもてない。ものをハッキリ決めれない、なぜか、そうきめるとそれが変になつてしまうように思われた。

……龍介は今暗がりへ身を寄せたとき、犬より劣っている自分を意識した。

三

龍介は歩きながら、やはり友だちがほしくなるのを感じた。孤ひとりでいるのが恐こわいのだ。過去が遠慮もなく眼をさますからだった。それは龍介にとって亡霊だった。――酒でもよ

かった。が、酒では酔えない彼はかえって惨めになるのを知っていた。龍介は途中、Sのところへ寄ってみようと思つた。

雪はまだ降っていた。それでも、その通りの両側には夜店が五、六軒出ていた。そしてその夜店と夜店の間々に雪が降っているので立ち寄るものはすくなかつた。が二、三カ所人集りひとだかがあつた。その輪のどれからか八木節やぎふしの「アツア——ア——」と尻上りに勘高かんくひびく唄が太鼓といつしよに聞えてきた。乗合自動車グジョグジョな雪をはね飛ばしていった。後に「チャップリン黄金狂時代、近日上映」という広告が貼はつてあつた。龍介はフト『巴里の女性』という活動写真を思ひだした。それにはチャップリンは出ていながつたが、彼のもので、彼が監督をしていた。彼がそれを見たのは恵子とのことが不快に終つたすぐあとだつた。彼には無条件にピタリきた。彼は興奮して一週間のうちに三度もそれを見に行つた。札幌の女が彼を見知り変な顔をした。その写真には、不実ではないが、いかにも女らしい浅薄あさはかさで、相手の男と自分自身の本当の気持に責任を持たない女のためにまじめな男がとうとう自殺することが描かれていた。そしてそういう女の弱点がかなり辛辣しんらつにえぐられていた。龍介は自分自身の経験がもう一度そこに経験しなおされていることを感じた。

彼は歩きながら『黄金狂時代』はぜひ見に行こうと思った。彼がその通りを曲つたとき、ちようどその角に五、六人の人が立つていた。龍介は通り過ぎる時にちよつと中をのぞいてみた。眼の悪い三十五、六の女が三味線を持つて何か言つていた。その前に、十二、三の薄汚うすぎたない女の子がちよつと前に泣いたらしいそのままのしかめた顔をして立つていた。「この子は！」年増としまはバチで子供の肩をついた。「さあ、今度は唄うねえ、いいかい。——可愛いねえ……」そう言つて、女は三味線の箱にさわる手首をちよつとつばでしめすと、しやちこばつた手つきで三味線をジランジランとならした。「さあ！」女の子をうながした。そしてア——ア——とすつかりかすれた声で出しをつけてやった。

女の子は両手を袖そでの中にひっこめたまま、だまつていた。

「また！」年増はさも齒をかんでいるように言った。

女の子は本能的になぐられる時のように頭に手をあげた。

「まあ、この子！」年増はいきなり女の子の背を撥ぼちでついた。女の子は足駄あしだをころばすと、よろよろして、見ていた人の足元にのめつた。

年増は「ええ、どうも、この子にア、ハア困るんです。へえ、こんなようじや二人とも干上りですよ。へへへへへ、どう——して、こんな子を持つたのやら、へえ……」と、頭

を時々さげて、立っている人の方を見ながら言った。「こうやってるんですけど、今晚は一文にもならないんですよ——この子が……」

誰かが金を投げてやった。眼の悪い年増は首をかしげていたが、笑顔をうかべて、二、三度頭をさげた。

「それ！ 可哀相だと思つてめぐんでくださったんだ。お礼を言つて。お金を……」

女の子は金を拾つて年増の手に渡した。女は受取ると、それを眼の前にかざして、いくらの金かを手ざわりでしらべた。

「へえ、へえ……どうもありがとうございます」

その時もう一人金をなげた。そして「あんまりいじめるなよ」と言った。彼はそれ以上見ていられなかった。彼は自分が不機嫌に腹の底から興奮してくるのを感じた。雪の降りのはひどくなっていた。後から分のわけ分らない三味線の音が聞えてきた。

Sはまだ帰ってきていなかった。Sの妹が、龍介が来たら、画を見て帰ってくれと兄に頼まれたと言つた。そして、静物を描いた十二号大のキャンバスを持ってきた。Sのお母さんが隣の室から電燈を引張つてくると画の方にそれを向けて見せた。

「立派です」と龍介は言つた。

「どういふもんですかねえ」とお母さんが笑った。
龍介は外へ出るときゆうに自家へ帰りたくなつた。

四

汽車はもうなかつた。龍介は帰りながら、自分の仕事の上で何かすばらしいことがしたいと思つた。彼はいつでもむだにカフエーなどを廻り歩いた帰り、よくそう思つて、興奮した。しかしそれが皆いい加減疲れきつた頭に、反動的に浮ぶ、いわば空興奮であるように思われ、淋しく感じた。龍介は一つの長篇に手をかけていた。が、彼自身の生活がグラツツついていたために、それまで変に焦点が決まらず、でき上らないままに放つておかれた。年々上る月給を楽しみに毎日銀行へ行き、月々いくらかずつか貯金し、おとなしい綺麗きれな細君を貰い、のんきに生活する。そのうちに可愛い子供もできるだろう。そして老後きれを不自由なく暮す……そこには何ら非難すべき点はない。彼の同僚たちは皆そう考え、そうなるために生活している。しかし、龍介は、そういう生活には大きな罪悪があると思つた。もしもこの世の中が完全で、幸福なもので「すべての人がお菓子お菓子の食える」境遇にあるも

のだとしたら、それでいいかもしれない。が、過渡期である。皆は力を合せてまず——まず、そういう世の中になるよう、努力しなければならぬ時であろう。が、彼らはそんなことには用事がなかった。彼らは「自分だけ」は少し辛抱してゆけば、とにかく幸福になれる「ところ」にいる、好きこのんで不幸になる必要がどこにある！ 龍介は多くの人たちが、まじめなおとなしい、相当教養ある世の中の役に立つ立派な人たちと言っているこれらの人々が、案外にも人類歴史の必然的な発展を阻止するこの上もない冒険者であると思つた。

龍介はそういう者たちの中にある自分の生活に良心的に苦しんだ。彼は自分ばかりでなく父のない自分の一家の生活を支えるために、この虚偽の生活に縛られていたのだ。ここからくる動揺が恵子との事にも結びつき、結局、龍介にも何も仕事ができないのだった。

龍介からはこの生活の意識は離れない。しかし「事実の上で」、ここから一步も抜きでない以上、それはただの考えとして檻の中の獅子のように、頭の中をグルグル廻るにすぎない。龍介はいつものように憂鬱になる自分を感じた。そういう気持になる理由がハッキリわかっているだけ、そして「考え」だけの上では結局どうにもぬけられないということが分っているだけ、たまたまなかった。まるで彼には二進も三進もゆかない地獄だった。

そしてこういうことにさんざん苦しくなるといつでも彼は自分でも変に思うほど、かえってでたらめな気持になった。

*

少しくると龍介はあやふやな気持で立ち止まった。

——彼は自分がズルかったことを意識した。彼は今までちつともこのことには触れずにながら、潜在意識のようなもので、ここへ来ることを望み、来たのだ。ここは彼のよう
にルーズな気持を持っているもののくる最後のところだと思ふと淋しかった。彼は立ち止まりながら真直ぐ家に帰ろうと考えた。が、彼は昨夜とその前の晩ちよつと寄つた女の処へ行つてみたい気持の方が強かった。結局彼はその方へ歩いた。

道の両側には、「即席御料理」「きそば」と書いた暖簾のれんの家が並んでいた。入口に女が立って、通る人と呼んでいた。マントを着た男がそんな所で「交渉」をしている。龍介を見ると暖簾の間から女が呼んだ。彼はそういう所を通り過ぎた。そしてちよつと行くと、一軒だけ離れて、そんな家がぼつちりあつた。そこだった。……龍介は二日前ここを通つたのだ。空のはれた寒い晩だった。入口に寄ると、暖簾のところに女がシヨールをして立っていた。入口は薄暗いので顔立ははつきり分らなかつたが、色の白い、十七、八の小柄

な女だった。

「寒い」のれんから首を出して龍介がそう言うのと、女は、「寒いねえ」と無愛想に言った。二人ともちよつと黙った。女は彼をじつと見ていた。

「上るの？」

「金がないんだ」そう言つて、「いくらだ」ときいた。

女は龍介の手をつかむと指を二本握らした。「これだけ……」龍介の眼から女は眼を放さずに言つた。

「ない」

女は龍介の顔にちよつと眼をすえた。それから「うそでしょう？」と言つた。

「うそは言わない」

また女は彼を見た。

「じゃ……」女は一本指を握らしてから、次に五本にぎらした。

「だめだ」龍介はそう言つた。

女はフンといったようにちよつとだまつたが、首を縮めて、「寒い」と独言のようにひくくつぶやいた。そして、「いくら持つているの？」ときいた。女は両手を袂たもとの中に入れ

て、寒そうに足駄をカタカタと小さきぎみにならした。

「景気はどうだ」

「ひつとりも！」案外まじめさを表面に出して言った。彼はその女にちよつと好意を感じた。「お話しにならないの。主人は……不機嫌になるでしょう……ご飯もろくに喰べさせないワ……それに、……」女は頭を二、三度振つてみせて、「ね、ね」と言った。根元のきまらない日本髪がそのたびに前や横にグラグラした。「お客さんがないと髪結賃かみゆいちんもくれないの。この髪かみずウと前のよ」

「……うん」龍介は髪結賃はいくらだ、と訊たずねようと思った。それぐらいなら出してやつてもいい気がした。

「ね、上るだけの金がなかったら髪結賃だけでもちようだいよ……三十銭」女はそう言つてぎこちなく笑つた。そして身体をちよつと振つて、外方そとを見た。

彼はせつかくの気持がこじけて、イヤになつた。その時、家の前を四十ぐらいの貧相な女が彼の方を時々見ながら行つたり来たりしているのに気づいた。龍介は女に、「ない。また来る」そう言つて、戻つた。ほかの人にこんなところを見られたくなかつたからだつた。龍介はちよつと来てから道ばたの雪に小用を達たした。用を達しながら、今の家の方を

見た。往来をウロウロしていた四十かっこう恰好の貧相な女がさつきとの女と、家の側の薄暗いところとに立って話をしていた。年老つた方の女が包みから何か出して相手に渡した。若い方はじいとうとつむといていた。しばらく何か話していた。

——龍介には分つた！

女のおつ母さんだつたのだと思うと、彼は真赤になつた。そして急いで次の通りへ出た。次の晩、龍介はもし女がいたら髪結賃をやろうと思つて、そこを通つた。蠶がまくち口から三十銭出すと、手に握つて持つた。歩きながら、ワザと口笛をふいた。そしたら女は顔を出す、と思つた。前まで来たが、出てこなかつた。龍介は往来でちよつと蹲かがんで中をのぞいてみた。いないようだつた。彼は入口まで行つた。障子にはめてある硝子ガラスには半紙はが貼つてあつて、ハッキリ中は見えなかつたが、女はいなかつた。龍介は入口の硝子戸によりかかりながら、家の中へちよつと口笛を吹いてみた。が、出てこない。その時、龍介はフト上りはなに新しい爪つまかわ皮のかかつた男の足駄がキッチンと置かれていたのを見た。瞬間龍介はハツとした。とんでもないものを見たような気がした。そこから帰りながら変に物足りない気持を感じた。そして何かしら淋しかつた。

しばらくして龍介はオーヴァーのポケットにつつこんでいた右手にしつかり三十銭を握

つていたのに気づいた。龍介はいきなり降り積った雪の中にそれをなげつけた。が、三つの銀貨は雪の中にちつとも手答えらしい音をさせなかった。

そして今夜で三回だ、龍介はフトそう思うと、何んのためにこう来るか、自分の底に動いているある気持を感じて、ゾツとした。女は外へは出ていなかった。が、足音を聞くとすぐ出てきた。

「兄さん、お寄り……よ」そう言いながら、彼の顔を見て、「この前の……また、ひやかし？」と言った。

「上るんだよ」ちよつと声がかすれた。

「本当？」と女はきいた。

五

廊下の板が一枚一枚しのり返っていて、歩くとギシギシいった。女は座蒲団ざぶとんを持って先に立ちその一番端しの室に彼を案内した。女は金を受取ると出ていった。廊下を行く足音を龍介はじいときいていた。彼はきゆうに身体が顫ふるえてきた。

龍介はズボンに手をつつこみ、小さい冷えきった室の中を歩いた。彼はこういう所に一人で来たこれが初めだった。来たい意思はいつでも持った。夜床の中で眼をさますと、何かの拍子から「いても立つてもいられない」衝動を感じるころがあった。そうすると口では言えないいろいろ淫^{いんわい}猥^{わい}なことが平気にそれからそれへとつづ^{いろどり}に彩をつけて想像される。それがまた逆に彼の慾情を煽^{あお}りたてた。が、彼はただ単純に、それだからといってこういう所へは来れなかつた。彼は出かけることもあつた。が、結局何もせず^{ぶじよ}に帰つた。それは普通いう「道徳的意識」からではなしに、彼の金で女の「人間として」の人格を侮^あ辱^くすることを苦しく思うことはもつと彼自身にとってびつたりした、生えぬきの気持からだった。

友だちといつしよにこういう処にくることがあつた。が、彼はしまいまで何もせず^{ぶじよ}に帰る。そんな時彼は友だちに「童貞の古物なんかブラ下げているなよ、みつともない！」と言われる。が、それは彼には当つていなかった。彼は童貞をなくすことにはそう未練を持つていない。ただその場合だつて、お互が人格的な関係にあることが、彼には絶対に必要だった。彼は友だちのように、「商売女は商売女さ」そうはなれなかつた。彼はそういう女をどうしてもエロチックには感ぜられなかつた。すぐその惨めさがきた。それで彼は生

理的な発作のようになる性慾のために、夜通し興奮して寝れないことがあった。こんなことで苦しむのはばかげたことかもしれない。が、プルドーンが、そんな時屋根の上にあがり、星を眺め、気を沈め、しばらくそうしてから室に帰り眠るといふことをきいて、同感だった。同じ気持の人がいるかと思うとうれしかった。

彼は顫えがとまらなかつた。何度も室の中を行ったり来たりした。彼は次の間を仕切っている襖ふすまをフトあけてみた。乱雑に着物がぬぎ捨てられてある、女の部屋らしく、鏡台がすぐ側にあつた。その小さい引出しが開けられたままになっていたり、白粉おしろい刷毛いはけが側に転がっていた。その時女の廊下をくる音をきいた。彼は襖をしめた。

女は安来節やすきぶしのようなのを小声で歌いながら、チリ紙を持って入ってきた。そしてそこにあつた座布団を二つに折ると×××××（以下略）

龍介はきゆうに心臓がドキンドキンと打つのを感じた。「ほか、俺は何もするつもりじゃないんだ」彼は少しもつた。女は初め本当にせず、×××××。龍介はだまって立っていた。

「本当？」

「本当だ」

「そう?……」×××そして、もう一度「本当?」とききなおした。女は立ち上った。

女は酒をとり室を出ていった。龍介は室の真中に仰向けにひっくり返った。低い天井板が飴色あめいろにすすけてところどころ煤すすが垂れていた。

龍介は虚ろな気持で天井を見ながら「ばか」声を出してひくく言ってみた。

「ばか!」少し大きくした。そしてその余韻よゐんをきいてみた。するときゆうに大きく「ばかッ!!」と怒鳴りたくなった。

女は無表情な顔をして酒を持って入ってきた。口の欠けた銚子ちょうしが二本と章魚たこの酢すものと魚の煮たものだった。すぐあとから別な背の低い唇くちびるの厚い女が火を持ってきた。が、火鉢に移すと、何も言わずに出ていった。

寒かった、龍介はテーブルを火鉢の側にもってきて、それに腰をかけて、火鉢はしの端はしに足をたてた。

「行儀がわるい」女は下から龍介を見上げた。

「寒いんだよ。それより、君はこれを敷け」彼は女に座布団を押ししてやった。が、女は「いいの」と言つて、押しかえしてよこした。

「——冷えるぜ」

「どうせねえ」そして、すすめるとまた「いいの」と言った。

「変だな」彼はそう言つて、むりに女に敷かせた。

「どうして兄さん敷かないの」座つてからも女はちよつと落着かないように、モジモジした。それから「じゃ、敷くわねえ」と言った。

女は酒をつぐと、

「ハイ」と彼に言つた。

「俺は飲まないんだ。君に飲ませるよ」

「どうして？」

「飲みたくないんだ」彼は女の手に盃さかずきを持たしてやつた。

「ソお」女は今度はすぐ飲んだ。

龍介は注いでやつた。

「本当、いいの？」

「うん」

女はちよつと笑顔えがおをしてのんだ。彼は銚子を下に置かずに注いでやつた。女は飲むたびに、「本当？」ときいた。

「この章魚たこも、さかなも食っていいんだ」

彼は割箸わりばしをわって、皿の上に置いた。

「いいの？——何んだか……」

女は少し顔を赤くして、チラツチラツと二、三度龍介を見上げると、「どうして、兄さん……」と言った。

「俺は食わないんだ。いいから」

「ソお、……なんだか……」

女はさかなを箸の先でつつついて、またひくく「いいの？」と言った。そして、最初箸の先にちよんびり肴はきを挟んで左手の掌てのひらにそれを置いて口にもってゆくととき、龍介をちよつとぬすみ見て、身体を少しくねらし、顔をわきにむけて、食べた。彼はすぐまた酒をついでやった。女はまたさかなを食った。章魚の方にも箸をつけた。腹が減っているんだなあ、と彼は思った。

「いくつだ？」

「——年？」眼にちよつとしたしなを作って彼を見た。

「うん」

「……十七」

「考えて言えアだめだ」

「本当よ。——十七」

「そうか……章魚がうまいか？」

「……」返事をしないで女が笑った。

「いつから？……」

「十五から」

「十五？——」

龍介は酒をついでやった。一本の方はもうなくなった。彼は女の目の前で銚子を振ってみせた。女はちよつと肩を縮めて、黙って笑った。

「まだ、あるんだ。安心せ」

彼はもう一本の方を手にもつて、「さあ、注いでやるぞ」と言った。そして、「どうしてこんな所へ来たんだ？」ときいた。

女はちよつとだまった。火鉢のふちにりょうひじ両脇を立てて、ちようどさかずきを目の高さ
に持っていた女は、口元まで持つていったのをやめて、じつとそれに見入った。両方とも

少しだまった。と、女は顔をあげて、

「そんなときいて何するの？」ときいた。そして、

「イヤ！ 私いや！」と言つて、頭を振つた。

「ききたいんだ」

間。

「どうして？」

「どうしてもさ。金のためにか、すきでか……」

「私言わないもの……」女はきゆうに笑いだした。

「好きで入つたんだらう」彼はちよつと断定的な調子で言つた。

「金だわ……でも、……」女は盃を火鉢のふちに置いた。

「でも、どうした？」

女は彼を今度は真正面から見つめて言つた。「何をそんなに聞きたがるのさ。……私の家は貧乏だったの。弟妹がまだ四人もいるんだもの。それでさ。……でも、そうねえ、やはり、こうやって、おしろい白粉をつけたりしてみ——た——かつたの、ねえ、そんなところもあつたの」

そう言つて、また独りで笑つた。

「フン……そうかなあ。それから君らはこういう俺たちを憎いと思つたことはないか」
女はちよつと眼をみはつた。

「どうして？」本当に分らないできているようにそう言つた。女は章魚を一つ箸にはさんで口にもつていった。それを口に入れながら、「どうして？」とまた言つた。

「君たちの体を……金で……そうだろう？」龍介もそう言いながら赤くなつた。

「お客さんだもの……」

女は単純に答えた。龍介はちよつとつまつた。

「貞操を金で買うんだよ……」

「そんなこと……」

「へえそんなこと……」彼もちよつとそう言わさつた。

「乱暴なお客さんでもなかつたら、別になんでもないわ」

「フーン。初めての時はどうだつた。恐ろしくなかつたか？」

「そうねえ……」女は独りで酒をついで飲んだ。「でも、変ねえ、そんなこと、いちいち、なんだか私話すのイヤになつた。……」

「大切な女の宝を失くすのだと思つて……」

「もう話さないもの」女は彼を見て、クスクス笑いだした。

「話してくれ。——」

「イヤねえ。——そう、初めのうち少し極りが悪かったぐらいよ」

女はブツキラ棒に言つて、「もう何も言わないよ。その代り今度来たら話す」

「——もう来ないよ。その手に乗るもんか」

女は女体を振つておおげさに笑つた。龍介は不快になつた。そして女が酒を飲んだりしているのをだまつて腰をかけたまま見下していた。首にぬつてあるお白粉がむらになつて、かえつて汚い、黒い感じを与えた。髪はやはりまだ結つていなかった。ものを食うたびに薄く静脈じょうみやくのすいてみえているコメカミが、そこだけ生きていのようにビクビク動いた。

彼は何か言おうとした。が、女がどうしてもピタリしなかつた。龍介はその時女の首筋に何か見たように思つた。虱しらみだつた。中から這はいできたらしかつた。首筋を明るいところまでくると、ちよつと迷つたとてもいうふうに向をかえて、襦袢じゆばんの襟えりに移つた。それから襟の一番頂上まで来ると、また立ち止まつた。その時女が箸を机の上におくと今虱が這いでてきたところが、かゆいらしく、顎あごを胸にひいて、後うしろくび首をのぼし、小指でち

よつとかいた。龍介はだまっていた。虱はそれから少し今来た方へもどりかけたが、すぐやめて、今度は襦袢と二枚目の着物との間に入っていた。

龍介はポケットから五十銭一枚をとりだして、テーブルの上へ置いた。

「何アに？」

「髪結賃。この前の……」

そして龍介は「もう帰るよ」と言つて立ち上つた。女も立ち上つた。

「帰ろう」

「そう？　ありがとう。じゃまたねえ」

龍介のあとからついてきた女は、そういうと、身体を二、三度ゆすり上げた。彼は何も言わずに外へ出た。出口でもう一度「またねえ、どうぞ」と女が言った。

龍介は外へ出ると興奮してきた。「誰も」「何も」分っていない、と思った。すべてが無自覚からきている。誰も自分の生活を見廻してみるのがないからだ、と思った。惨めだが、しかしあの女たちはちつとも自分のその惨めなことを知っていないのだ。これは恐ろしいことだと思つた。彼は何度も雪やぶの中に足をふみ入れた。しかし、同時に彼は自分に対する反省を感じた。ハッキリ何をしなければならぬかとかいうことが分つていな

がら、ちつともきまらない、あやふやな自分が考えられた。どこかで恵子がこの野良犬のようにほつつき廻っている彼を嘲笑あざわらっているように思われた。こういう気持の場合恵子のことを思うことだけでも彼はたまらなかつた。

前から人が来た。彼とすれちがう時に、ハズミで、どしんと打ち当つた。半纏はんでんを着た丈の高い労働者だつた。彼はちよつと振りかえつて見た。男も後を見た。そして「あほう……」と言つた。酔っているらしかつた。

「ばか野郎!! どこをウロついてるんだい、この穀むくつぶし!!」

しかしそう言つたか、どうか分らない、そう聞いたように思ったその瞬間、彼はきゆうに自分の身体が軽く、ちよつと飛び上つたように感じた。眼がクラクラツとした。そして次の瞬間には龍介は道ばたの雪やぶの中に手をついていた。片方の眼がひどく痛かつた。見開くことができなかつた。龍介は高いところから落ちた子供が、息がつまって、しばらくの間泣けないでいるように、動かずにじいとしていた。動けなかつた。彼はしばらくその恰好のままだった。

雪が彼の上にかすかな音をさして降っているのを感じた。が、彼はじいとしていた。

青空文庫情報

底本：「日本文学全集」 小林多喜二 徳永直集」 集英社

1967（昭和42）年12月12日発行

入力：林 幸雄

校正：浅原庸子

2005年1月16日作成

2014年5月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

雪の夜

小林多喜二

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>